令和５年度

心の輪をつなぐ体験作文
障害者週間のポスター
作品集

群馬県 / 群馬肢体不自由児協会

あいさつ

群馬県知事　山本一太

「心の輪を広げる体験作文」、「障害者週間のポスター」の募集に多くの方々から御応募をいただき、深く感謝申し上げます。今年度は、県内の小中学校・高等学校等の児童・生徒の皆様から、作文の部で九十七作品、ポスターの部で十四作品の応募がありました。どの作品も、障害のある人とない人との関わりを通じた思いやりの心が表現されており、将来を担う若い皆様の心に、このような気持ちが育まれていることをとても嬉しく思います。今回は、この作品の中から十三作品を優秀作品として表彰することにいたしました。

県では、障害者施策の基本となる「バリアフリーぐんま障害者プラン8」がスタートして2年が経過しました。計画の基本理念である「全ての県民が、障害の有無にかかわらず、互いに人格と個性を尊重し合いながら、地域で共に暮らし、支え合い、安心して暮らすことができる共生社会の実現」に向けた様々な施策に今後も取り組んでいきます。この作文・ポスターの募集もその一環として行っており、今年度の優秀作品をまとめたこの作品集を、多くの方々に御覧いただくことで、障害や障害のある方に対する理解がより一層深まることを期待しております。

結びに、作品の応募に当たり、御協力いただきました関係者の皆様に厚く御礼申し上げ、あいさつといたします。

令和五年十二月

入賞作品

心の輪を広げる体験作文【知事表彰】

■小学生部門

最優秀賞　店員さんの笑顔　太田市立沢野中央小学校　五年　平井　雄大……1

優秀賞　かきかきのばあば　太田市立鳥之郷小学校　三年　鈴木　結愛……2

佳作　耳が聞こえない両親　太田市立鳥之郷小学校　四年　天笠　翔太……3

■中学生部門

最優秀賞　誰もが生きやすい世の中へ　太田市立城東中学校　二年　内藤　仁南……4

優秀賞　障害者と良く関わるために　前橋市立木瀬中学校　二年　松井　聖奈……6

佳作　平等と公平　前橋市立木瀬中学校　二年　清水　奏音……7

■高校生部門

最優秀賞　目指すべき社会　群馬県立吾妻中央高等学校　一年　茂野　美羽……8

優秀賞　友達　群馬県立伊勢崎興陽高等学校　二年　小池　沙恵……10

佳作　心の輪を広げる体験作文　群馬県立吾妻中央高等学校　三年　市村　桃……12

心の輪を広げる体験作文【肢体不自由児協会長表彰】

■中学生部門　心のバリアフリー　太田市立城東中学校　一年　小林　奏介　……15

障害者週間のポスター【知事表彰】

■中学生部門

最優秀賞　一人じゃない　板倉町立板倉中学校　二年　高瀬　倭子

優秀賞　大切なもの　伊勢崎市立第一中学校　三年　大友　皐愉

佳作　盲導犬と住める町　伊勢崎市立第一中学校　三年　大和　璃音

心の輪を広げる体験作文

【知事表彰】

■小学生部門　最優秀賞

店員さんの笑顔

太田市立沢野中央小学校
五年　平井雄大

ある日、ぼくはお母さんとショッピングモールへ買い物に行きました。

買い物が終わって、帰る前にスターバックスコーヒーによることにしました。

ぼくはお店の前においてあるかんばんが目にとまりました。かんばんの内容は「ただ今、耳が不自由なバリスタがレジを担当しております。指差しや筆談等によるご注文をお願い致します。」でした。

レジの店員さんたちを見ると、一人むねに耳が聞こえないというバッチがついていました。

ぼくはあの店員さんがレジだったらどうしようかなと不安に思いました。

ついに順番が来て、案内されたのはその耳が聞こえない店員さんのレジでした。

その店員さんは、笑顔で手を挙げてぼくとお母さんをよんでくれました。

レジの横には、メニュー表のほかに指差しで注文できるメニューシートもありました。お母さんが注文をしようとした時、その店員さんが「注文は指差しでお願いします。」と書かれた手のひらサイズのボードも見せてくれました。

メニューでコーヒーを指差しで選び、サイズをもう一つのメニューから選びました。

お母さんが指差しでメニューを選ぶたび、その店員さんは笑顔で左手をグッドのポーズにしていました。その笑顔につられてお母さんも笑顔になっていてとても楽しそうでした。

ぼくもいっしょに笑顔になりました。

注文したコーヒーを飲みながら、お母さんとその店員さんの話をしました。

お母さんは、「すごくいい経験ができたね。世の中には目に見える障がいや目に見えない障がいをもっている人がいるんだね。そのせいで大変な思いや、つらい思いをしている人がたくさんいるけど、それでも笑顔で一生けん命働いてるんだね。」と、言っていました。

また別の日、ぼくはじゅくが終わって帰る前に、近くのコンビニへ行きました。

そしたらまた、むねに耳がきこえないというバッチがついている店員さんがいました。

そして、レジの横にも指差し用のシートがありました。

ぼくは、こんな身近にも障がいをもって働いている人がいたことにおどろきました。

ぼくはこの二つの経験をして、障がいで困っている人がいたら進んで助けようと思いました。そしてまた、耳の聞こえない店員さんに出会ったら、今度はぼくが注文したいと思いました。

■小学生部門　優秀賞

かきかきのばあば

太田市立鳥之郷小学校
三年　鈴木結愛

わたしのおばあちゃんは耳が聞こえません。おばあちゃんは目も見えません。耳は、おばあちゃんが子どものころに高いねつが出て、きゅうにねつを下げてしまって聞こえなくなってしまったそうです。目は、わたしが小さな赤ちゃんだったころは、少しだけ見えていたそうです。少しずつ見えなくなって今ではほとんど見えていないようです。

おばあちゃんの家へ行くと、おばあちゃんはわたしが来たことに気づいていません。かたをポンッとたたくとビクッとして、わたしが来たことを知り、ニコッとわらいます。目が少し見えていたころは紙に、絵や文字を書いてお話をしました。今は、おばあちゃんの手のひらにゆびで文字を書いてお話をします。

だからわたしは、おばあちゃんのことをかきかきのばあばとよびます。

かきかきのばあばにお人形をもっていってわたすと、お人形の頭や体をさわってかくにんします。おようふくをわたすとお人形にきさせてくれます。ブロックをもっていってわたすと、ブロックをつなげてネックレスやブレスレットを作ってくれます。目は見えないけれど、手でさわるだけで何でもできるのですごいと思いました。

かきかきのばあばの家はいつもきれいにかたづいています。わたしや妹がおもちゃをちらかしているとパパやママにおこられます。

なぜなら、おもちゃをふんでしまったらあぶないからです。つかったものを元あったところにもどさないと見つけられなくなってこまってしまうのできちんともどします。

しょうがいをもつ人だけだとできないこともあって大へんだけど、わたしたちが少し気をつけたり、たすけてあげるだけで、できないことができるようになると思います。どこかでこまっている人がいたらわたしは声をかけてみようと思います。もしたすけがひつようならたすけてあげます。みんながたすけあって、みんながえがおで安心してくらせるせかいになってほしいです。

■小学生部門　佳作

耳が聞こえない両親

太田市立鳥之郷小学校
四年　天笠翔太

ぼくの両親はちょうかくにしょうがいがあります。

ぼくとお姉さんは耳がきこえます。

両親、または片方の親がちょうかくにしょうがいを持つ聞こえる子どもを「ＣＯＤＡ（コーダ）」と言います。

つまり、ぼくとお姉さんはＣＯＤＡです。

ぼくは小さい時に両親の耳が聞こえない事で「大きくなったら、お父さんとお母さんの耳を治すお医者さんになりたい」と思っていましたが、大きくなるにつれて、当たり前の日常生活で気にならなくなってきました。小さい時から両親が手話で会話をしているところを見てまねて物心ついた時には簡単な手話をするようになりました。

両親とのコミュニケーションは手話と口話です。両親をよぶ時は声でよぶのではなく、よびに行くので少し大変だなと思った時もありましたが、よびに行くのはなれてきました。

ある日、両親とおでかけしていて、お店に入ると、両親はかならず「耳が聞こえません」と言います。それをわかって、大声で話したり、マスクをしたまま話しかけていました。両親は困っていましたが、それでも「筆談をおねがいします。」と言っても対応してくれなかった時があり、ぼくが手話で通訳をした事があります。最後に両親が「通訳をしてくれてありがとう。」と言ってくれた時はうれしかったです。

こういう理かいがまだまだだなと残念に思いました。

また、コロナワクチンを受けに行った時に、手話のできる女医さんに出会ったり、かかりつけ医に行き、薬をしょ方される時に、薬ざい師さんが「私は手話ができますよ！」と言い、手話で対応してくれて、ぼくはビックリしたけど、耳が聞こえないお母さんのために対応してくれたと思うとうれしくなりました。他にもお買い物に行く時も店員さんが筆談をしてくれたり身ぶりで伝えようとしている姿を見てうれしくなりました。こうやって理かいが少しずつ広まっていき、手話もまだまだだけど、広めていきたいなと思いました。

また学校では友達からも手話を教えてと聞いてきます。そんな時は簡単な手話を教えています。

ぼくにはしょう来のゆめがあります。

それは「べんご士」です。

耳が聞こえない人もべんご士をたよってくる事もあるかもしれないので、その時は手話で対応したいと思います。それまでに両親や他のちょうかくしょうがい者や手話のできるちょう者ともっと手話で話して、たくさんおぼえて、スムーズに話せるようになりたいです。

■中学生部門　最優秀賞

誰もが生きやすい世の中へ

太田市立城東中学校
二年　内藤仁南

私の願い、それは誰もが平等に暮らせる社会になることだ。特に障害のある人に対する差別や特別扱いがなくなれば良いと思う。そう考えるきっかけとなる出来事があった。

それは、中学一年生の秋頃、友達と「スターバックス」に行ったときのことだ。そこで注文をするときに接客して下さった店員さんは、耳の不自由な方だった。そのような方に接客してもらうのは初めてだったため少し驚いたけれど、身振り手振りや、素敵な笑顔で対応していてとても格好いいなと思った。レジの近くにも「耳の不自由な方が接客をしております。指差しでのご注文など、ご理解とご協力よろしくお願い致します。」というような説明書きを見つけ、お店側の配慮にも感銘を受けた記憶がある。

しかし、このことを思い出し母に話してみると、「障害のある方と接して理解が深まったのはすごく良いことだけど、悪気なく特別扱いみたいになっちゃってるんじゃない？」と返ってきた。確かに私は無意識のうちに、障害のある人を区別して見てしまっていたのかもしれない。障害者だろうと健常者だろうと、素敵な接客に変わりはないはずだ。

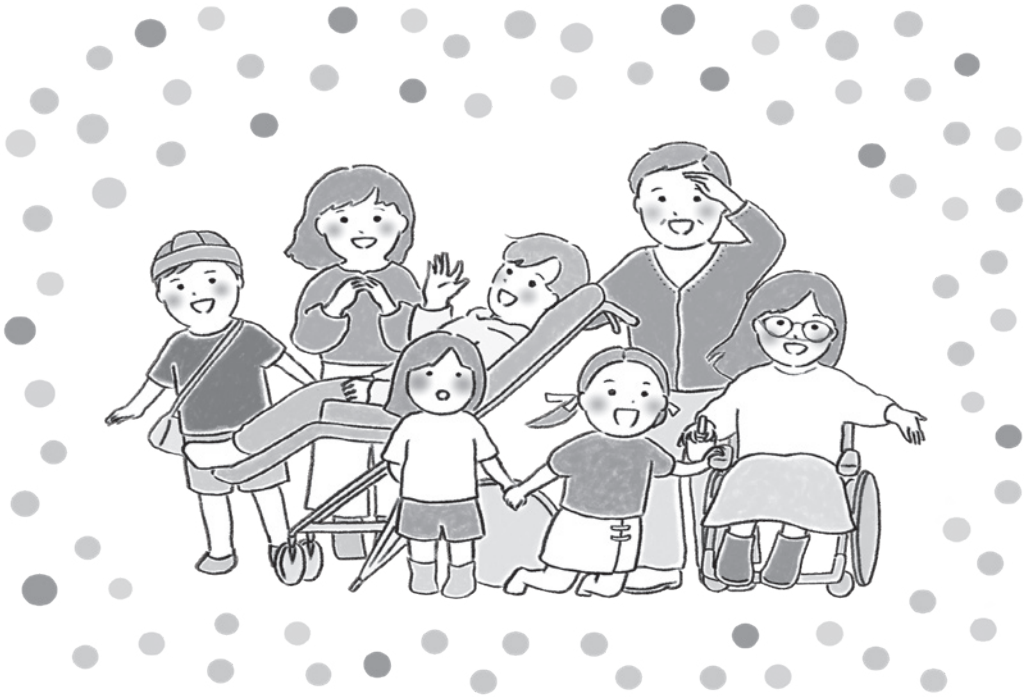
私はどんな人でものびのびと楽しく働いたり過ごせる社会になると良いなと思っている。

そのためにまずは、「障害があるのにこれができてすごい。」というような考えから変えてみると良いのではないだろうか。もちろんそう考えている人に悪気はないだろうし、私もそう思うことがある。なんなら、障害者に対しての褒め言葉と捉える人も少なくないだろう。しかし、本当にみんなが生きやすく、区別のない社会を目指すのならば「この人の笑顔素敵だな。」、「この人仕事が早くてすごいな。」というような一人の普通の人として接することができれば良いのかなと思う。このような障害者も健常者と同じように当たり前に生活できる社会こそが、正常な社会であるという考え方のことを、「ノーマライゼーション」というそうだ。もちろん、トラブルを未然に防ぐための説明書きやマークは必要だと思う。それを見たとき、私たちが先程のように考えられるかが大切なのである。

そう考えると、スターバックスの取り組みは本当に素晴らしいと私は思う。調べてみると、スターバックスでは「従業員が障害者だというだけで特別な対応はとらない」、という方針だそうだ。このように障害のある人も普通の人と同等に働けるお店が増えていけば、どんな人も関係なく、同じように接することができる社会に近づくのではないだろうか。

つまり、大事なのは障害のある人を変に特別扱いしたり、差別をするのではなく、ノーマライゼーションの考え方に基づき平等に接

することだと思う。悪気が一切なかったり、無意識のうちにそう考えてしまう人も多いだろうし、私の考えが正しいかどうかはわからない。けれど一人一人が少しずつ障害のある人に対する理解を深め、誰もが当たり前の日常生活が送れることを、心から願っている。



■中学生部門　優秀賞

障害者と良く関わるために

前橋市立木瀬中学校
二年　松井聖奈

皆さんは「障害者」についてどう思いますか。あまり関わる機会がないという人や、「何を考えているか分からない」「ちょっと変わっている」などの先入観から声をかけるのは気が引けると思っている人も多いのではないでしょうか。ですが私は、積極的に声をかけることが大切でそのためには障害者についてよく知ることが必要だと思います。

私のいとこは発達障害を持っています。発達障害とは、生まれつきの脳機能の発達の偏りによる障害です。それには様々な症状があり、いとこは音に敏感だったり、長い間じっとしていることができないなどの症状があり発達障害の中でも症状が重めです。そんないとことは親戚の集まりで顔を合わせることがありました。いとこは私より年上で、小さい頃からその人と会っていたため、私は「この人はこういう性格の人なのだ」と理解していたのでその人を避けたりはしませんでした。

でもいとこは、発達障害の症状から聞き手のことをおかまいなしに一方的に話したり、同じようなことを何回も聞いてくることが多くあり、私は接し方がわからず深く関わることがありませんでした。ですが、いとこはたまに私や親戚のみんなに手紙をくれることがありました。その手紙には、いとこが見たものやその時の出来事が書いてありました。いとこにとって直接話して伝えるのは難しいから紙に書いて伝えてくれたのだと思います。それをもらったときは、健常者に差別された経験もあるだろうに、健常者である私と自分からコミュニケーションを取ろうとしてくれているということがとてもうれしかったです。

この出来事からいとこに対する私の中でのイメージが変わっていきました。以前はいとこを避けたりはしなかったものの、心の中では少し苦手だと感じていました。それは、私が人見知りをしてしまうタイプでそもそも人としゃべるのが苦手でましてや相手は障害の症状から一方的に話してくるので、対応に困ることが多くあったからです。ですが、手紙をくれてからは、その人に対して他のいとこや祖母の接し方を見て真似して相づちを打ってみたり、友達と話すときのように普通に話してみたりして私なりの良い接し方を見つけることが出来ました。そして、いとこが手紙を通してコミュニケーションを取ってくれたことは、私が発達障害者だけでなく、障害者全体について深く考える良いきっかけになったと思います。

この体験、気持ちの変化から私達は今後、障害者のことを理解し、困っていたら見てみぬふりをするのではなく、積極的に声をかけてあげるべきだと思います。気持ちを行動に移すのは勇気がいると思います。ですが、一人一人がその勇気を持てば障害者を差別する世の中を変えることができるのではないでしょうか。

■中学生部門　佳作

平等と公平

前橋市立木瀬中学校
二年　清水奏音

小学六年生の秋、大会があった。その大会で目についた一人の男の子がいた。その子は左腕の手首から先がない子だった。びっくりした。自分のチームにそんな子なんていなかったし、今までで見たことなかったからだ。

しかも行っていたスポーツはソフトテニス。ボールをつかんでラケットをにぎってという両手を使うスポーツだ。でもその子は自分の胸を使いサーブを打っていた。すごいなと感じた。でも、それでもし相手の子が手を抜いていたらどうだろう。その子は少し嫌な気持ちになるだろうし、試合を素直に楽しめないと思う。しかも大会だ。誰が一番上手かを決めるのに手を抜いていてはだめだ。なので相手の子も一生懸命やっていた。良いことだと思う。ダブルスだったので、当然ペアの子もいる。そのペアの子も、「こいつ手がないから組みたくない。」とかではなく、しっかりとペアとして一緒に戦っていたし、相手の子に「自分をねらってペアの子には打たせないで。」なども言わず平等にソフトテニスを楽しんでいたので良かったなと思った。

手や足などに障害がある人がスポーツをしていることは少なくない。野球だってサッカーだってやっている人がいる。私はその人たちをすごく尊敬している。なぜなら、私が手や足に障害があったらスポーツがやりたいとは思わないだろうと思うからだ。また、差別されたら嫌だなと思い、初めは誰とも会いたくないと思う。なので、すごく尊敬している。

私は何も障害がなく生まれてきた。初めて障害を持っている人を見た時は驚いた。でも、差別するなどはよくないので、見かけても、普通の人と同じように接している。でも、全てが同じでは良くないと思う。できないことの方が多いと思う。なのにみんなと同じように何も使うななどは良くない。「平等」は良いと思う。でも時と場合を考えて「公平」にしなくてはいけないと思う。とても難しい。

でも、結構皆できていると思う。なのでこのようなことが全世界の人に広がればいいと思った。

■高校生部門　最優秀賞

目指すべき社会

群馬県立吾妻中央高等学校
一年　茂野美羽

障害を持つ人と持たない人が関わることは互いを理解し助け合うことができる大切な経験だと私は思います。お互いの違いを受け入れ、触れ合うことで新たな視点や価値観に気づくことができます。

私には小学校から仲の良い知的障害をもった友達が居ます。その子は他の人より、考えたり意思表示をしたりといった誰かと関わることがすごく苦手でした。しかし小学校の頃はサポートクラスという形でしたが行事や参加できる授業には、みんなと同じように参加して楽しそうにしていました。それが中学校から大きく変化しました。

中学生になり五つの小学校が合わさり大人数になりました。そして障害があることの理解が難しくなり、その子を避ける人も多くいました。しかしそれは、他の小学校の人だけではありませんでした。今までその子と同じ時間を過ごしてきた人の中にも中学生になり急に避け始める人がたくさんいました。でも私はそのことを全て否定はできないと思います。中学生になり私たち人間は、お互いのさまざまな違いが気になるようになります。例えば私はあの子より太ってるとか、〇〇くんより××くんのほうがかっこいいというような違いです。私はそこに障害も入ると思います。しかし、ここで難しいのが対応が分からないという点です。さっきの例で言えば、私はあの子より太っているからダイエットをしてあの子みたいになる。〇〇くんより××くんのほうがかっこいいから××くんと話す。

簡単な話です。それに対して障害はそんな簡単な話ではありません。どうして良いか分からないからです。さまざまな違いが気になる中で生まれた障害という壁。今まで障害についてなにも考えてこなかった私たちにとって、なんのヒントも考えてもらえないクイズはすごくハードルが高かったです。障害とはなにか。どうしてこの子は私と違うのか。その答えが出せずに関わることから離れたのだと私は思います。しかし、私は離れずに関わり続けることを決めました。初めは優しさのつもりでした。けれど関わり続けてある発見をしました。

それは障害があってもなにも変わらないということです。その子にもみんなと同じように好きなアイドルは居るし、好きな曲も食べ物も趣味もあります。特に好きなアイドルのことになると時間も見ずにキラキラした顔で魅力を伝えてきてくれます。私の誕生日は毎回覚えていてくれてプレゼントをくれるし、私が知らないこともたくさん知っていて、いつも教えてくれます。障害があることなんか全然気になりません。障害があるということ。それは分かったつもりになっていても実は本

人にしか分からないこともあります。だからぜひ障害がある人との交流を嫌がらずに関わっていってほしいです。私はそのことで良い点がたくさんあると思います。

まず障害に対する誤解や偏見を取り除く機会が生まれます。私が今回友達と関わってみて知ったことがあるように関わることでの発見が必ずあるはずです。

そして相手の困難や苦労に寄り添い共感することで個々の人間性や内面を真に理解することができます。一つ目と同様にその人自身と向き合い理解することで障害、そして本人の心のケアにも繋がっていくと思います。

最後に共に活動したり、参加することで地域や社会全体にプラスになると思います。自分だけでなく周囲の人とも関係をもってもらうことで共生を促進し多様性を受け入れる文化ができると思います。

このことから、障害をもつ人と関わることは本人にも自分自身にも、そして社会全体にも大きな意味をもちます。今後、福祉職を目指していく身として多くの人に伝え実行していかなければならない課題だと思います。

■高校生部門　優秀賞

友達

群馬県立伊勢崎興陽高等学校
二年　小池紗恵

私が中学一年生のとき、クラスに少し変わった子がいました。「変わった」とは、周りの子と見た目も、話し方も、違うということです。私は、障害者の子かなと思いました。

特に仲良くなろうとも思わなかったので、話しかけませんでした。話してもいないのに、私はその子のことが、苦手でした。ですが、修学旅行でその子と同じ班になってしまいました。その班は、仲の良い友達が誰もいなくて、最悪な班だと思いました。私の友達がすごく明るい子だったので、私も明るい子だと勝手に思われていました。なので私は、班の人に話しかけました。みんな楽しく話してくれました。障害者の子は話に入れていませんでした。ただみんなに合わせて笑っていました。私は、その子と同じ小学校だった子が話しかけてあげるだろうと思ったけど、誰もその子に話しかける子はいませんでした。とうとう私はその子に話しかけました。その子はふつうでした。少し話し方が幼稚だったけど、楽しく会話をしました。私はおどろきとうれしさが混ざった変な気持ちになりました。修学旅行当日、班行動で私は、その子とずっと話していました。その子はよく笑う子で、私が話すと笑ってくれます。私のボケにツッコミを入れてくれたり、たまにその子がボケたり、笑いが分かっているなと思いました。私以外の班の人はその子とあまり話していなかったけど、その子が同じ班で良かったと思っています。私の班は結局、最悪ではなく最高の班でした。

約二年後の卒業式の日、その子は私に一緒に写真をとろうと言ってくれました。クラスが変わってからあまり話していなかったけどその子はずっと友達だと思ってくれていたことを知り、私はうれしかったです。

今こうしてふり返ってみると、私はその子に対して決めつけていることが多いと思いました。高校で福祉を学び、高齢者の方と話したり、知的障害者の方と交流したりしました。

なので今は、障害者に対する固定概念が無くなってきているけど、中学生の頃の私は、その子に対して、変わった子や、周りと違う、ふつうに話せるなどの失礼な考え方をしていたことに最近気づきました。その子に対してだけではなく色んな人に対して見た目で判断したり、決めつけたり無意識にやってしまっていたかもしれません。それがダメなことだと気づけたのは、その子と仲良くなったからだと思います。ただ学ぶだけでは、どうして決めつけることがダメなのかや、失礼さを体感できないからです。私は、その子と仲良くなる前、見た目で判断したり、決めつけたりした経験があるので、それが失礼だったことに気づき、罪悪感を抱きました。なので私は

これからは、こうしようや、気をつけようというふうに考えられています。

もう一つその子と仲良くなれて良かったと思うことがあります。私は、すごく人見知りをする子でした。自分から話しかけるのがとても苦手だったけど、その子に話しかけたら意外と楽しくて、話しかけて良かったと思いました。それから少しずつ人に話しかけるのが苦手ではなくなってきて、今では、新しい友達も増えました。その子と出会っていなかったら、今でも人に話しかける勇気がなくて、私はもしかしたらずっと一人になっていたかもしれません。

私は、苦手だったその子と仲良くなれて良かったです。その子は、障害者です。健常者の私よりもよく笑う楽しい子です。その子と出会えて良かったです。人を見た目で判断し決めつけることは、失礼で間違っているということを彼女から学びました。人に話しかける勇気を彼女からもらいました。人は、ごめんねより、ありがとうと言われるほうがうれしいというのを聞いたことがあります。今、その子に会ったら、見た目で判断してごめんねと、友達になってくれてありがとうを、ありがとうの方を強めに言いたいと思います。

■高校生部門　佳作

心の輪を広げる体験作文

群馬県立吾妻中央高等学校
三年　市村　桃

私が出会ったのは、知的障害をもつある少女でした。彼女との出会いは、私にとってとても特別であり、心に深く刻み込まれるものとなりました。私は高校で介護福祉について学んでおり、この少女と出会う前は「障害」という言葉を聞くと、無自覚に避けてしまっていたかもしれません。しかし、彼女との出会いを通して、「障害」を抱える人たちに対する理解が深まったと同時に、彼女自身が持つ魅力と可能性を見出すことができました。

彼女はコミュニケーションに困難を抱えていたため、どうやって接してよいか戸惑うことがありました。しかし、彼女が無邪気に笑ったり、自分の思いを伝えようと必死になる姿を見て、私もそれに合わせて笑顔で接するようになりました。一度、彼女と一緒にアート壁画を作るワークショップに参加したことがあります。最初は、私たちのグループに少女が入ったことで参加者たちは困惑している様子でした。しかし、彼女が自由自在に色を塗り、感性豊かな絵を描いていく姿を見て、すぐに障害や違いなどを超えた交流が生まれました。

私はこの体験を通して、障害者が社会で抱える問題は、身体的な障害や知的な障害だけにとどまらないことに気がつきました。周囲の人々からの理解不足や偏見、差別、アクセシビリティの問題、さらには経済的な問題も抱えています。このように、障害者が社会で生きる上で直面する問題は多岐にわたります。

私たちは、これらの問題を解決するために社会を変える勇気を持つ必要があります。

まず第一に、私たちは障害者への理解を深める必要があります。障害者は、私たちと同じように生きている人たちです。ただ、私たちと少し異なる場面で人生を送っているだけです。そのため、誰もが自己実現し、幸せに生きるために必要なことを支援することが重要です。障害者に対する偏見や差別がなくなり、社会が理解しやすい場所になるように、私たちは真剣に考えることが必要です。

アクセシビリティも大事な問題です。障害者が生活するにあたって、周囲の環境は非常に大切です。だからこそ、障害者が行きたい所に行き、生活しやすい社会を作るために、アクセシビリティの改善が必要です。そのためにコミュニティーセンターや商業施設などの公共施設に、車いすが通ることのできるバリアフリーの施設や障害者専用トイレ、点字案内の充実などが必要です。

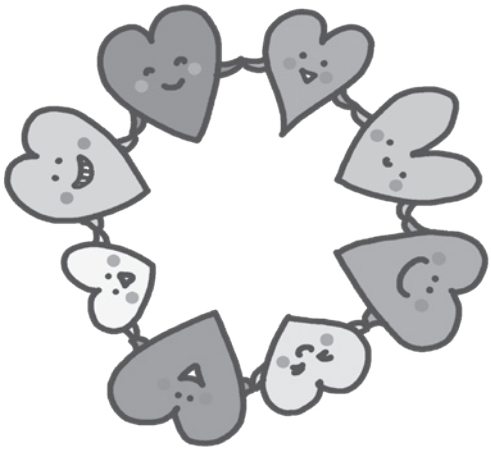
また、社会的な問題は個々人だけでは解決できません。政策の改善やシステムの改革が必要なのです。障害者への社会的な支援や雇用環境の改善、生活保護制度の改善、福祉施設の充実、障害者に対する法律上の保護の強

化などが必要です。それと同時に、私たちが様々な形で交流し合うことで、人と人との絆を深めていくことができると確信しました。

彼女との出会いをきっかけに、私は介護福祉にもっと積極的に関わり、障害を持つ人たちとの交流を通して、共に生きる仲間として認め合い、支え合う社会づくりに貢献することを目指します。違いを受け入れることで、自分自身も成長し、心の輪を広げることができると、私は感じています。

最後に、私たちは障害を持つ方々を支援するために、自分自身が人間として成長し、自己実現することが重要です。障害をもつ方々との接し方や支援方法は様々です。だからこそ、自分自身の成長と経験から、障害をもつ方々に対する支援をより、的確に、効果的に行えるようになることが必要です。

私たちはこうした視点をもち、障害をもつ人たちと同じ社会で共存していくことが必要です。私たち自身が、障害という境界線を越えて、多様な人々と共に生きる社会をつくりあげることが重要です。各自が力を発揮し、社会を変える勇気を持ち、障害をもつ方々に対する支援を改善していくことが必要です。



心の輪を広げる体験作文

【肢体不自由児協会長表彰】

■中学生部門

心のバリアフリー

太田市立城東中学校
一年　小林奏介

ぼくのおじいちゃんは、骨肉腫という病気で、ぼくが生まれる前に、左脚を切断しました。だから、ぼくが知っているおじいちゃんは、いつも車いすに乗っているか、義足をつけている姿でした。

ぼくには、それが当たり前だったけど、一緒に買い物へ行ったりすると、周りの人がおじいちゃんのことを心配するような目で見てくるのが、小学生のぼくでも分かりました。

きっと、それはおじいちゃんの方が感じていたように思うと、とても心が痛かったです。

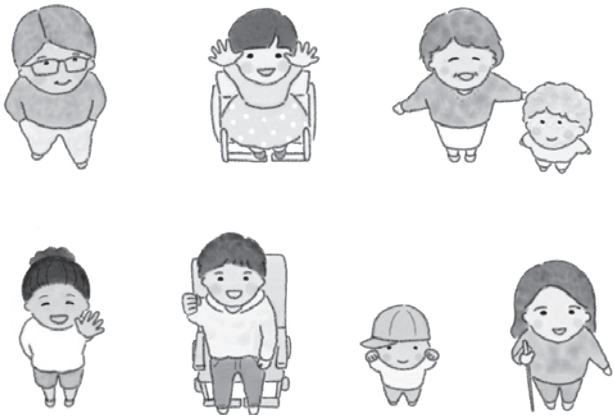
おじいちゃんは、ゲームも上手だし、車の運転だって出来るし、どこへだって行けるから可哀想なんかじゃない。だけど、おじいちゃん自身が転んだらどうしようとか、人の目を気にするようになって、一緒に出かけることがなくなっていきました。そして、家にひきこもるようになり、病気が再発して、亡くなりました。

あのとき、不安でいるおじいちゃんに、みんながいるから大丈夫だと言って、家から連れ出していればよかったと後悔しました。

きっとおじいちゃんと同じように感じている人がいるかもしれません。今は、バリアフリーな場所も増えて、車いすを使用する方達も生活しやすくなったと思いますが、まだまだ障害のある人を受け入れる人間の方が理解が足りないように思います。おじいちゃんはいつも、すぐに手を貸してこようとする人に、大丈夫ですと断っていました。おじいちゃんは一人で出来ることもたくさんあるからです。

ただ、どうしても出来ないときはぼくにこれしてとか頼んできました。常に心配するのではなく、困った時に助けてあげることが大切だと思います。それは、障害のある人もない人も同じだと思います。

ぼくは、誰かが困っているとき、気づいて、助けてあげられる人になりたいです。そして、みんなが生きやすい世界になればいいなと思います。



障害者週間のポスター

【知事表彰】

■ 中学生部門 ■

最優秀賞

「１人じゃない」

板倉町立板倉中学校

２年　高瀬　倭子

優秀賞

「大切なもの」

伊勢崎市立第一中学校

３年　大友　皐愉

佳作

「盲導犬と住める町」

伊勢崎市立第一中学校

３年　大和　璃音

……豆　知　識……

手足の不自由な人のために

○階段で車イスの昇り降りを手伝うときは、二・三人で昇りは前向き、降りるときは後ろ向きで、車イスの人が落ちないように気をつけましょう。

○松葉杖の人や義足の人などが乗り物で困っているのをみかけたら、進んで席をゆずりましょう。

○雨の日は松葉杖の人が困る日です。傘はさせないし、足下はすべる危険もあります。松葉杖の人を見かけたら、守ってあげましょう。

○手足の不自由な人を見かけても、すぐ手を貸す必要はありません。困ったときや助けを求められたときに、はじめて手を貸してあげてください。

手足の不自由な人たちは、人に迷惑をかけるのを、とても心苦しく思うのです。それだけに、こまやかな心づかいが必要です。

令和五年度

「心の輪を広げる体験作文」
「障害者週間のポスター」
作品集

令和五年十二月　発行

発行所　群馬県健康福祉部障害政策課
群馬県肢体不自由児協会
〒三七一―八五七〇　前橋市大手町一―一―一
☎〇二七（二二二六）二六三四